令和4年度　学校評価結果報告書

(1) 学校教育目標	心豊かに、たくましく生きぬく人間を育成する。 (1) 進んで体を鍛える子　(2) 進んで学習に取り組む子　(3) 仲良く助け合う子　(4) 根気強く実践する子
(2) 現状と課題	(現状) 在籍児童生徒数は12人で、ここ数年は横ばいである。特別支援学校としては小規模校であるが、地域における特別支援教育のセンター的機能を果たしながら、視覚障害を主とした教育の充実に取り組んでいる。人事異動により、視覚障害教育の経験豊富な教員が数名となり、専門性の維持及び指導技術の継承が課題となっている。 (課題) (1)健康教育や安全教育を充実させ、健康で安全な生活を送ることができる習慣や態度を育てる。(2)授業を充実させ、進んで学習に取り組む子・意欲的で主体性のある子を育てる。(3)教科等の指導・特別活動・生徒指導・生活指導・自立活動の充実を図り、仲良く助け合う子・協調性のある子・豊かにコミュニケーションできる子を育てる。(4)課題(1)～(3)の実現のために全教職員の協力による学校づくりを進める。(5)学校運営協議会を通して保護者及び地域の学校運営への参画を促し、保護者や地域との協働による学校づくりを進める。
(3) 重点目標	1　一人一人の目標を家庭と共有し、生活習慣を身に付けさせるための指導を家庭と協力して行う
	2　学校管理下における事故・ケガ0の実現のため、教職員一人一人の安全意識を向上させ、学校全体で取り組む
	3　基礎的・基本的な学力を身に付けさせるために一人一人に応じた授業改善を進める
	4　子どものよいところ・得意なところが発揮できる場面や教育活動を設定し、幼児児童生徒一人一人の自己有用感や自己肯定感を高めるようにする
	5　保護者の願いや思いを受け止めつつ、子どもの自立と社会参加に向けて必要な教育活動を実践するために、指導のねらい、内容及び結果について説明責任を果たし、連携して教育にあたる
(4) 結果の公表	保護者、教職員には結果を書面で配付し保護者集会、職員会議で説明した。その他、学校のホームページで公表の予定。

自己評価実施日	令和4年12月15日(木)
学校関係者評価実施日	令和5年2月9日(木)

(9) -イ　学校関係者評価委員会の構成
学校運営協議会委員１１名

自己評価					学校関係者評価	(10) 次年度への課題と改善策
番号	(5) 評価項目	(6) 具体的方策	(7) 具体的方策による目標の達成状況	(8) 目標の達成度	(9) -ア　学校関係者からの意見・要望・評価等	
1	一人一人の目標を家庭と共有し、生活習慣を身に付けさせるための指導を家庭と協力して行う	・個別の教育支援計画による目標の共有 ・学校と寄宿舎による日常的な情報交換と長期休業中におけるケース会議の実施	寄宿舎を利用している児童生徒を中心に指導を行った。個別の教育支援計画による、家庭、学校、寄宿舎の三者で目標を共有し、指導に取り組むことができた。長期休業中に学校、寄宿舎でケース会議を行い、目標達成に向けた手立て、指導の経過の共有、課題解決に向けた話し合いをすることで、より細かな指導・支援を継続することができた。	A	学校と寄宿舎での日常的な情報交換も工夫が図られている。	次年度は、学校と寄宿舎で、必要に応じてカンファレンスを実施し、児童生徒の課題や支援方法などの共通理解を図り、形成的評価を行いながら支援方法や指導方法の改善に取り組む。

2	学校管理下における事故・ケガ０の実現のため、教職員一人一人の安全意識を向上させ、学校全体で取り組む	・ヒヤリハットの報告と情報共有、必要に応じたケース会議の実施 ・毎月の施設設備安全点検と年３回の遊具安全点検の実施 ・危機管理マニュアルの周知と評価、改善	ヒヤリハットの報告件数は、令和３年度の４件に対し、１月末で１件と減少した。しかし、寄宿舎で児童が転倒し骨折する事故が１件発生している。教職員のリスクマネージメントの意識に差がある。等に取り組む必要がある。また、次年度に向け、食物アレルギー対応のマニュアル化について検討した。	A	意識に差を感じることは、どこの所属組織でもある、難しい課題である。あきらめずに取り組むことが必要である。	職員研修を企画するとともに、危機管理マニュアルの改善に努める。
3	基礎的・基本的な学力を身に付けさせるために一人一人に応じた授業改善を進める	・障害や特性への配慮 ・主体的対話的で深い学びの実現を目指した授業づくり ・言語活動（話し合い活動）の充実 ・ＩＣＴの活用 ・授業のユニバーサルデザイン化	校内研究と連動したＩＣＴの活用に関する研修会や授業実践を実施したことで、教員の意識の高まりにつながり、デジタル教科書、タブレット、短焦点プロジェクター等を活用した授業が増えた。主体的対話的で深い学びによる授業実践、話し合い活動の充実については、他県の盲学校と計画的に遠隔授業を実施したことで、相手の考えや思いを聞く、自分の考えを話すなどのやりとりを通して、自分の考えを整理する貴重な機会となった。	A	人事異動や児童生徒の減少に伴い、視覚障害教育の専門性の維持向上及び指導技術の継承が難しくなってきている状況は、適切な教育を子どもたちに受けさせられない大変なことである。	次年度も継続して、授業改善を図ることを目的とした校内研究を設定し、一人一授業研究取り組む中で、全教員一人一人の教科指導のスキルや従来から行っている視覚支援の方法と合わせて、ＩＣＴ活用スキルの向上を図る。また、地域の人材活用も検討する。
4	子どものよいところ・得意なところが発揮できる場面や教育活動を設定し、幼児児童生徒一人一人の自己有用感や自己肯定感を高めるようにする	・キャリアパスポートの活用と段階的なキャリア教育 ・障害認識を含め、適切な自己理解の形成を図る計画的な指導 ・道徳や特別活動、自立活動等の指導内容の充実	道徳や特別活動を中心として、相手の立場や気持ちなどについて考える機会を設定したり、準備や後片付けの際に協力し、お互いを認め合うような活動を設定したりすることができた。自信をもって活動したり、相手を気遣って行動したりする様子が多く見られるようになった。	A	子どもたちの将来は、予測ができない状況であり、コミュニケーションの力が低くなっていると感じる。人間が教材になっているということが大事だと思う。いろいろな物を使うよりも生身の人間と一緒に行うこと、体験することで感じることがたくさんあると思う。	自己有用感や自己肯定感を具体的に評価するには至ってない。評価方法を検討するとともに、生活の中でお互いを認め合えるような活動を今後も設定していく。
5	保護者の願いや思いを受け止めつつ、子どもの自立と社会参加に向けて必要な教育活動を実践するために、指導のねらい、内容及び結果について説明責任を果たし、連携して教育にあたる	・個別の教育支援計画による目標と評価の共有 ・学校運営協議会における熟議の推進	保護者には、連絡帳や個別面談等を通して学習活動のねらいや内容等について説明し、共通理解を図りながら子どもの教育にあたることができた。学校運営協議会については、教員の理解が進んでいないことから、学校運営協議会の趣旨や、地域との連携・協働が教育活動の充実につながることについて、再確認する必要がある。７月に学校職員、保護者、地域住民が参加する熟議を計画したが、新型コロナウイルス感染症感染拡大のため中止となった。	A	地域の人との連携は重要である。地域には本校を知らない人も多い。災害訓練、手話学習会など参加しやすい活動を行うのも良いが、育てたい子ども像を明確に打ち出す必要がある。	次年度は熟議や保護者、地域住民が参加する学校地域協働活動を推進する。学校職員にも周知を図り、具体的な活動計画を作成する。

(11) 総括	保護者、児童生徒、教職員による評価を4段階評価で実施した。保護者の評価が平均3．53、児童生徒の評価が平均3．40、教員が平均3．67、寄宿舎指導員が平均3．75で、いずれも到達度Aという高評価であった。次年度に向け、課題と改善策について全職員で共通理解を図るとともに、育てたい子ども像を明確にし、地域の力やつながりを軸とした学校運営協議会の活動を生かした学校づくりを推進していく。